

# 「シテ形接続」をめぐって

## — 付帯状態のシテ節 —

中野 はるみ

### はじめに

日本語学習は、初級段階では話しことばから始める。話しことばは文型練習の積み重ねである。文型練習とは文法の反復練習でもある。文型の習得により文法に習熟していくことが目指されている。文法指導において、動詞は「ます形」から始め、つぎに te-form と呼ばれる連用形、すなわち「シテ形」へとすすんでいく。

te-form 指導の多様性は、例えば『日本語初歩』（国際交流基金日本語国際センター、1981）の「主な文型・文法事項」（pp.393～418.）に次のように te-form 指導が列記されていることで知らうる。

- L 6 〔文法事項〕 形容詞連用形「～くて」の形で語句を結ぶ用法（やすくて、じょうぶ）
- L 10 〔文法事項〕 形容詞「～くて」の形で文を続ける用法
- L 13 〔文法事項〕 動詞の連用形「～て」  
〔文型〕 ～して、（～して）～します／しました
- L 14 〔文型〕 ～してください ～しないでください
- L 16 〔文法事項〕 補助用言「～ている」の進行・継続を表す用法  
「～ている」の形による連体修飾の用法  
〔文型〕 （～で）～は（いま）～しています  
（きょう）は（雨）が（ふつ）ています
- L 17 〔文法事項〕 補助用言「～ている」の結果の存続を表す用法  
〔文型〕 ～は～をしています
- L 18 〔文法事項〕 補助用言「～てある」の用法  
「～ている」「～てある」と結びつく動詞の種類  
〔文型〕 （～に）～が～てあります  
～は（～に）～てあります
- L 20 〔文法事項〕 試みの動作を表す補助用言「～てみる」の用法  
動作の完了・期待外の結果を表す補助用言「～てしまう」の用法  
〔文型〕 （～を）～してみます  
（～を）～てしまいます
- L 26 〔文法事項〕 「～てもいい」「～てはいけない」の用法  
〔文型〕 ～してもいいです ～してもかまいません ～てはいけません
- L 32 〔文法事項〕 結果の維持を表す補助用言「～ておく」の用法  
〔文型〕 ～しておきます

このように「シテ形」を使う表現は多様なので、日本語教授上では、te-form は重要なファクターである。教授者も学習者も「シテ形」の学習に力を入れる。というのも I グループの動詞は特

に音便を伴うものが多く、不規則で覚えにくい面があるからである。

表1 te-form 一覧

Verb form [V-te] & [V-ta]			
	[V-(r)u]	[V-te]	[V-ta]
Group I	-ku, -gu	-ite, ide	-ita, ida
	kiku to here	kiite	kiita
	iku to go	itte	itta
	isogu to hurry	isoide	isoida
	-mu, -bu, -nu	-nde	-nda
	nomu to drink	nonde	nonda
	yobu to call	yonde	yonda
	shinu to die	shinde	shinda
	-su	-shite	-shita
	hanasu to talk	hanashite	hanashita
	-u		
	kau to buy	katte	katta
	-ru	-tte	-tta
	kaeru to return	kaette	kaetta
-tsu	-tte	-tta	
matsu to wait	matte	matta	
Group II	-ru	-te	-ta
	taberu to eat	tabete	tabeta
	miru to see	mite	mita
Group III	kuru to come	kite	kita
	suru to do	shite	shita
	benkyoo suru to study	benkyoo shite	benkyoo shita

出所：TSUKUBA LANGUAGE GROUP "SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE" Vol.1,  
凡人社、1991、pp.121~122.

上記のような複雑な活用を取得した日本語学習者は、「シテ形」接続の多様な表現をも会得し、日本語の話しことばを自由に操れるように成長する。

日本語の難解さは、話しことばを会得してからさらに始まる。話しことばと書きことばには、明らかに異同があらわれるからである。初級段階を修了し、中・上級段階に進むにつれ、書きことばの読解と作文へ、日本語教育は比重を増していく。

ここで、初級レベルで覚えた「シテ形」接続はアスペクト関係の補助動詞、授受、謙譲の表現

に關係する補助動詞などを除いて、読解文においては目にするのがあまりなくなるといえる。激変していくといっても過言ではない。しかし、日本語学習者には「シテ形接続」を多用する傾向がみられる。

この乱用の多くは、他の接続的表現、～たら、～から、～ので、～ば等、を使うべきところで使わず「シテ形」で代用するという点であるが、「連用形接続」の表現の方が適当であろうと思われるところで「シテ形」を使っているときもある。

外国語学習の目標のひとつは、native speaker のように学習言語で表現できるようになることであろう。表現には、「話すこと」と「書くこと」が含まれる。

中・上級学習者は、大人の母語話者の言語表現を学習し、それに近づき、洗練された話しことば・書きことばで表現できる力を会得したいと思っている。「シテ形接続」と「連用形接続」の両方を自由に使った表現ができるように指導することが教授者に望まれる。

従来<sup>(1)</sup>の研究では「シテ形接続」は話しことば的、「連用形接続」は書きことば的であるとされ、その文体的相違は誰もが認めるものではあるが、書きことばの上で、私たち日本語話者が、どのような基準で「シテ形接続」と「連用形接続」とを使い分けているかについて言及しているものは多くない。その微妙な使い分けと意味の相違について、これまでの学説をふまえ、意味用法の分類を試みしてみる。本稿が、日本語学習者のより流暢な日本語習得の一助となりうればと思う。

- 1) 「連用形による並列接続は、一般的に書き言葉的であり、話し言葉ではテ形による接続のほうがふつうである」寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版、1991、p.218.

## I 「シテ形接続」の概観

仁田氏のシテ形接続に対する観点は優れて組織的・体系的である（仁田義雄「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版、1995、pp.87～126。以下仁田論文と略称する。）。シテ形接続の意味用法が多岐にわたり、振幅が大きいことも、仁田氏に先行する諸説において指摘されてきたことである。例えば、

①森田良行『基礎日本語辞典』角川書店、1989、pp.752～756.

②言語学研究会・構文論グループ「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学2』むぎ書房、1989、pp.11～47.

③寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版、1991、pp.219～221.

④南不二男『現代日本語文法の輪郭』大修館書店、1993、pp.74～120.

などで触れられているように、分類とその名称も多彩である。さらに、「て」（場合によっては「で」）をともなう品詞も、動詞に限らず、イ形容詞、ナ形容詞、もある。しかし、ここではあくまでも、<動詞+て>を主軸とし、必要な場合にのみ他について論及していくこととする。

まず、①森田(1989)では、分析1において、「て」の用いられる文脈を示し、次のようにいう。

「『て』は、『て』に先行する部分（前件）においてまず場面的状況を作り、後続する部分（後件）は、その状況下において生ずる事柄・事態である」（p.752.）

また、分析2において、接続助詞「て」の意味を

- (1) 並列：「何がどんなだ／何がどうする」の現象文が「て」によって並ぶときに、まず、「並列」となる。前件と後件で主語が交替する。また、特定の主体がいろいろと行為を行ったり、種々の状態をかね備えていることを述べる場合まず、文頭にその主体を「は」で示し、以下「て」によって行為や状態を並列する文型をとる。

(顔が丸くて、背が高い・・・「そして」の関係)

- (2) 対 比：「何は何だ／どんなだ／何する」の対比強調の判断文か、転位文が並ぶとき、「て」による接続は“対比”の意識を強くする。前件・後件で主語が交替し、それぞれの主語・述語が互いに同類の事柄同士の対応として、「AはBで、A'はB'だ」文型となるところが特徴的。

(夏は暑くて、冬は寒い・・・「一方」の関係)

- (3) 同 時 進 行：同じ行為が主体が前条件に立って、各述部に継続動作性の動詞が立つ場合にこの“同時進行”となりやすい。

(手を挙げて横断歩道を渡ろうよ・・・「ながら」の関係)

- (4) 順 序：前条件の二つの動作・作用に時間的ずれがある場合に生ずる意味である。

(三べん回って煙草にしよう・・・「てから」の関係)

- (5) 原因・理由：前の動作が終わったことによって次の結果生じたという意識が強調されれば“原因・理由”となる。

(値段が高くて買えない・・・「ので」の関係)

- (6) 手段・方法：前件・後件が意志的となると、「て」は手段・方法へと転ずるのである。

(わが身をつねって人の痛みを知れ・・・「によって」の関係)

- (7) 逆 接：前件の示す状況から予想される結果に反する事態が後件に来るとき“逆接”となる。

(仏造って魂入れず・・・「のに」の関係)

- (8) 結 果：仮定の結果と既定の結果がある。“……した場合／……すれば／……した結果／……したので”の意を表す。仮定の結果は一般論となり、既定の結果は具体的事実となる。

(雨降って地固まる・・・「その結果」の関係)

の8種に分けて説明している(pp.753~756.なお、用例は、森田良行『日本語の類意表現』創拓社、1990、p.407.による)。

②言語学研究会のばあい、シテ形を「なかどめ」とし、これを

〈第一なかどめ：連用形〉並列の関係を表す

〈第二なかどめ：シテ形〉二つの動作・状態の間の複合的な従属の関係を表す

の2つに分類し、〈第二なかどめ〉の特徴を、複合性として総括する。言語学研究会は、

「複合性は第二なかどめがつくりだすところの意味的な関係の、基本的な特徴である」

(p.16.)

と明言し、

ふたつの動作の複合 (A) ひとつの動作の、その面からの特徴づけ  
(B) ふたつの動作の先行・後続の関係

という図式を提示している(p.16.)。さらに、ここで言及された「動作」は《動作》と《状態》に分けられなければならないとされ、「第二なかどめ」を、

I 主要な動作と副次的な動作との複合

II 主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合

III 主要な動作の特徴づけとなっているばあい

IV 第二なかどめの動詞が具体的な動作をさしだして定形動詞がその動作を意義づけている

というふうに、4つの場面に分けている(pp.17~19.)。

③寺村(1991)は、「テ形による接続」の項で、動的動詞と状態的な動詞の場合を分けて考え

ている。

動的動詞：並んだ順にそのことが生起する（した）意味がともなう。テ形による接続では、いっそうその感じが強くなる。

状態的な動詞：時間的先後があることもあるが、ないこともありうる。ない場合はより並立的ということになる。

さらに、それぞれの動詞の場合、「前項（ $V_1$  テ）が、後項（ $V_2$ ）の動作・行為・できごとのおこなわれかたを限定する、あるいは特徴付ける働きをしていることが多い」と指摘する（p.219.）。また、「～ナクテ」の形を示し、状態性の動詞（おそらく状態的な動詞と同意で用いていると思われる一中野）は、並立的にも因果関係的（つまり主従的）結合に使われる（p.220.）とする。形容詞における並立的接続では、前項・後項の入れ替えが可能である（p.220.）という。

④南(1993)では、シテ形は、従属度により、

〈テ1〉 主文で表されるおもな動作・状態などと平行して行われる副時的な動作(p.79.)

（「首ヲカシゲテ走ル」の類）

〈テ2〉 継続的または並列的な動作・状態(p.80.)

（「戸ヲバタントシメテ出テイッタ」の類）

〈テ3〉 原因・理由(p.80.)

（「カゼヲヒイテ休ンダ」の類）

〈テ4〉 提題の～ハ、陳述副詞などを含むもの(p.97.)

（A社ハタブン今秋新機種ヲ発表スル予定デアリマシテ、～」の類）

との4つに分類している（用例は全て p.97.）。

このように、さまざまな切り口からアプローチがなされてはいるが、意味用法が実現される条件や特徴を明確にし、それらの用法の相違点を鮮やかに浮き立たせている説は少ない。そのため仁田氏は、分類のための手順として、

- 1, シテ節や主節の述語がどのようなタイプの述語であるのか
- 2, シテ節や主節の表している事象の意味タイプがいかなるものなのか
- 3, それら事象の相互関係をどのようなものと認定するのか

の3つを提起した(p.88.)。提起された手順に従ってシテ形の様態を順次みていくことにより、シテ節と主節との意味的關係は明らかになり、さらに、繋がりや中間に位置するもの、他の成分(接続詞的副詞成分、副詞)の挿入による用法の移り行きさえも包括できる体系を構築していくことが可能となろう。従来の説は意味用法の典型的な例のみが目立つ形で抽出され、中間に位置するものがあるとは書かれているものの、その移行、繋がりに対する考察は十分でないものが多い。

仁田氏は、「シテ節は、文(節)的度合いの点において、もっとも高い所に〈並列〉を有し、もっとも低い所に〈付帯状態〉の〈より副詞化したもの〉を有している存在である」(p.103.)とする。また、仁田氏は、主節とシテ節の意味的關係を〈付帯状態〉〈継起：時間的継起・起因的継起〉〈並列〉というふうに3種4類にまとめている。それらの意味と用法の特徴は次の表で概観できる。

表2 シテ形接続の概観

タイプ		シテ節の表す意味	生起時間関係	主体
付帯状態		主たる事象の実現の仕方	同時	同一
継起	時間的継起	時間的先行関係	継起	同一((異種))
	起因的継起	起因的事象	継起	同一(異種)
並列		共存並立する事象	同時((異時))	同一/異種

出所：前掲『複文の研究(上)』p.91.

## II 付帯状態のシテ節

シテ節は3種4類に分類されるが、連用形接続との相違の著しい付帯状態を表すシテ節をとりあげてみよう。付帯状態については、仁田氏によりつぎのように定義されている。

「シテ節で表されている事象が、主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾するといったありかたで、主節と結びついている」(仁田論文、p.89.)

また、シテ節はある一定の条件のもとで付帯状態と呼ぶに相応しい有り様を示す。その条件として、

「このシテ節が主たる動きや状態の実現のされ方を限定・修飾している、ということを受けて、シテ節と主節の事象の主体は、同一でなければならないし、シテ節の事象と主節の事象は、同じ時間の中に存していなければならない」(仁田論文、pp.89~90.)

ということが示されている。

こうした定義や条件から窺えるように、付帯状態の範囲はかなり広く限定的ではない。したがって、他の説では限定された範囲で特徴を抽出し名称を与えているため、うまく重ならない場合もでてくる。たとえば、森田説の「て」の8分類のうちの「(3) 同時進行」が付帯状態に相当すると考えられるが、ぴったりと重なるわけではない。森田説の「(3) 同時進行」は仁田説の付帯状態の一部であるとするのが妥当であろう。なぜなら、森田は、

「同じ行為が主体が前後件に立って、各述部に継続動作性の動詞が立つ場合にこの“同時進行”となりやすい」(前掲『基礎日本語辞典』p.753.)

とし、仁田説の「シテ節と主節の事象の主体は、同一でなければならない」と重なるからである。しかし、森田説では動詞は継続動作性の動詞に限定され、心的状態を表す瞬間動詞や対象変化動詞などは含まれていない。

また、言語学研究会によるシテ形の名称「第二なかどめ」の4分類、

- I 主要な動作と副次的な動作との複合
- II 主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合
- III 主要な動作の特徴つけとなっているばあい

IV 第二なかどめの動詞が具体的な動作をさしだして定形動詞がその動作を意義づけているには、付帯状態、時間的継起、起因的継起が混在している。「第二なかどめ」によって成立する意味的な関係の基本的な特徴は、

「ふたつの動作がひとつにまとまって、ひとつの複合動作をかたちづくっている」(前掲『ことばの科学2』p.15.)

ところにあり、また、

「これらの動作のし手は同一である」(同書、p.15.)

点にもその特徴がみられるとされる。これらの特徴から、ひとつの主語とふたつの述語といった形態の文は、言語学研究会によって、『ふたまた述語文』という名称が付与されるところとなった。ところが、寺村『日本語のシンタクスⅢ』には、〈付帯状態〉に該当する名称は記されていない。

また、南説による分類では、

「〈テ1〉主文で表されるおもな動作・状態などと平行して行われる副次的な動作」(前掲『現代日本語文法の輪郭』、p.79.)

が、付帯状態に該当すると考えられる。また、そこでは、「状態副詞的」という用語で付帯状態を表している。

さて、仁田説では、付帯状態を表すシテ節は、シテ形接続の中で最も節的度合いの低いタイプであるために、他の説では見られない副詞に近似したシテ形が存在するとし、語相当のシテ形の存在は付帯状態を表すシテ節の一つの特徴であるとされる。こうした視点から付帯状態を表すシテ節は、

①内的構造を持つ節的なもの

②語相当のもの

とに分けられる。そして、仁田氏は「①内的構造を持つ節的なもの」をさらに

〈し手容体〉

〈心的状態〉

〈し手動作〉

の3種に下位分類し、この3種以外を

〈付属状況〉

と仮称し、合計4種に下位分類している。「②語相当のもの」とは、かつては「シテ形」であったものが副詞化したものであると考えられる。

さて、「付帯状態」という用語は仁田説において用いられ、用語としての定着をみていくこととなるが、仁田説に先立って、内容的には、『て』形の副詞的用法』の名の下に「付帯状態」に言及している論稿がある。それは、

成田俊男「動詞の『て』形の副詞的用法—様態動詞を中心に—」『副用語の研究』明治書院である。

成田論文によれば、

「南不二男(1974)の4段階の内、もっとも従属度の高いAに相当する「テ1」とされる用法では、そこに用いられる動詞にあるかたよりがみられる。このかたよりは、それらの動詞の性質と従属度の高いいわば修飾的なあるいは副詞的な用法の性質との関連によるものである」(成田論文、p.137.)

〔引用文中の南不二男(1974)とは、南不二男『現代日本語の構造』大修館、1974、p.137.のことである—中野〕

として、動詞の性質に注目する。動詞のある特定の性質が「て」形の副詞的な用法の性質を決定する大きな要因となっていることを成田論文は看取している。したがって、

「このような副詞的とも呼びうるような用法に用いられる動詞のうち、人間のある姿勢をあらわすような「様態動詞」をその典型的なものとしてとりあげ、動詞の側から副詞的な用法をみてみたい」(成田論文、p.137.)

として、「様態動詞」を取り上げることとなるのである。「様態動詞」とは、「人間のある姿勢をあ

らわすような」動詞のことをいい、

I 姿勢をあらわすもの……立つ、すわる、横になる、しゃがむ、うつむくなど

II 状態をあらわすもの……だまる

に2分される。成田論文では、「様態動詞」の特質は以下の5点に要約される。

1. 主節には動作主を要求する意志動詞が用いられ、「て」形の動詞の要求する動作主は主節のそれと一致する。
2. 主節末は、命令・依頼などのムード表現が可能である。
3. 主節の動詞のみが要求する名詞句は自由に従属節の前に位置することができる。
4. 「～て」を「～ながら」におきかえにくい。
5. 「～て」は、I にあげられた動詞では「～た姿勢で」に、I およびII にあげられた動詞すべてにおいて「～たまま」におきかえられる。(成田論文、p.139.)

このように、「『て』形の副詞的用法」としながらも、内容的にはほとんど付帯状態についての記述がなされていることは注目に値する。

「付帯状態」について言及している論文として、もうひとつ、

三宅知宏「～ナガラと～タママと～テー付帯状況の表現一」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版、1995、pp.441～450.

がある。

三宅論文では、「付帯状況」という語を用い、「付帯状況を表す副詞節」を、

「ここでいう付帯状況を表す副詞節とは、益岡卓郎・田窪行則(1992)に従い、『ある動作に付随する状態や、ある動作と同時に並列的に行われている付随的な動作を表す』と規定しておく」

〔三宅論文、p.441.なお、益岡卓郎・田窪行則(1992)とは『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出版、1992、のことである一中野〕

というふうに、益岡卓郎・田窪行則(1992)の定義をそのまま援用している。こうした前提の下に三宅論文は、動詞の分類をアスペク的な観点から考察している。ただし、その分析視角は、

森山卓郎「時定項分析」『日本語動詞述語文の研究』明治書院、1988.

によるとしながらも、動詞をアスペク的な観点からタイプ分けしている(p.442.)。「一時的なもの」と「持続的なもの」と分けられているが、ここでは「付帯状態」に関係する「持続的なもの」のみを取り上げておこう。

・持続的なもの

「過程」 …歩く／歌う／騒ぐ／泣く／祈る／叩く／しゃべる／等

「維持」 … { [主体変化]: 座る／黙る／(目)を閉じる／持つ／等  
[客体変化]: 預ける／貸す／借りる／等

「結果持続」 … { [主体変化]: 遅れる／忘れる／酔う／(病気)にかかる／等  
[客体変化]: 出す／無くす／等

「過程／変化(永続的)」…殺す／壊す／洗う／焼く／煮る／作る／等

「過程／維持」 … { [主体変化]: 着る／履く／(メガネを)かける／等  
[客体変化]: (窓を)開ける／積む／(旗を)揚げる／着せる／等

「過程／結果持続」 … { [主体変化]: 移る／脱ぐ／渡る／習う／等  
[客体変化]: 集める／入れる／結ぶ／揃える／等

上記の分類のうちで、「過程」は付帯状況を表せるとして以下の用例が載っている。

- ・泣いて、電話をした。
- ・笑って、サヨナラを言った。

・鼻唄を歌って、公園を散歩した。

また、「維持」(「過程／維持」も含む)の場合は、最も生産的に付帯状況を表すとされる。その用例として、

- ・上を向いて、歩こう
- ・頭にバンダナをまいて、歌を歌った。
- ・壁にもたれて、音楽を聴いた。
- ・手を握って、彼女と見つめあった。

が掲げられている。

さらに、「結果持続」(「過程／結果持続」も含む)も付帯状況を表すことができるとされ、

- ・酒に酔って、車を運転した。
- ・びしょびしょに濡れて、部屋に入ってきた。

という用例が示されている。

結論として、

「テ節は、『維持』あるいは『結果持続』を持つ場合に、また、まれに『過程』のみを持つ場合に、付帯状況として成立し得る、ということになる」(三宅論文、p.449.)

と纏められている。

付帯状態のシテ節は、〈し手容態〉〈心的状態〉〈し手動作〉〈付属状況〉〈より副詞化したもの〉に分類できる。以下、この分類に従って順次みていくことにしよう。

## II-1 し手容態

仁田論文では、〈し手容態〉を表す動詞は、

- (1)姿勢変化動詞「シャガム、坐ル」
- (2)再帰動詞(再帰用法の動詞「首ヲカシゲル」「眼ヲ伏セル」を含む)  
「スリッパヲ履ク」「服ヲ着ル」
- (3)対象変化動詞「鍵ヲモツ、トランクヲ下ゲル」

などがあるとされ、結局、こうした動詞の

「シテ形は完了的意味を持ち、結果状態の現存を表している」(仁田論文、p.94.)

というのである。仁田論文で用いられている「変化後の姿勢の維持」や「変化後の対象の状態(主体の結果状態)」や「変化後の対象状態の維持」という説明は、すべて「結果状態の現存」としていい。こうした動詞のシテ節は、「～した状態で」と読み替え可能なのである。(1)~(3)に対応する用例として、それぞれ以下のような実例が挙げられている。

- ・自分は何気なく、しゃがんで見ていた。
- ・そして朝の光がオレンジ色の希望を投げかけるころ、わたしは汗で湿った服を着て、また《寮》に出かけていった。
- ・そこで、女中が鍵をもって、私をまっていた。

「しゃがんで」は、《姿勢変化》を表すものであり、「汗で湿った服を着て」は、《着脱》に関わるもの、「鍵をもって」は、《携帯》を表す。〈し手容態〉のシテ節は、《姿勢変化》《着脱》《携帯》とでも呼べる事象を形成する動詞によって、構成されるのである。

森田氏のいう「(3)同時進行」の用例のうち、〈し手容態〉を表しているであろうと思われる用例(前掲『基礎日本語辞典』、pp.753~754.)としては、

- ①飛行機が煙を吐いて墜落した。
- ②腕を組んで話す。

- ③首を長くして待つ。
- ④パチパチ音を立てて燃えている。
- ⑤目を開いて眠っている。
- ⑥手ぐすねひいて待っている。
- ⑦大の字になってのびている。

などが示されている。①②③④⑤⑥は、再帰用法の動詞であり、⑦は、《姿勢変化》を表しているが、彼の説明は、⑤⑥⑦の用法について、

「静止的な状態～のような“……したまま” “……した状態で” という状態性の前件にも付く」(前掲『基礎日本語辞典』、p.754.)

とし、「ながら」には状態性を表す働きがないこととの差異を記す。

言語学研究会は、先に挙げた「第二なかどめ」の4分類のうちの「II主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合」の項目aで、明確に分析の方向性を示している。

「第二なかどめが、定型動詞によってさしだされる動作のし手の《ふるまい状態》をさしだして、その《ふるまい状態》のなかでし手の動作が進行していることを表現する。この《ふるまい状態》という用語のもとに、わたしたちは姿勢と服装とを考えている」(前掲『ことばの科学2』、p.17.)

ここに、《ふるまい状態》の内容が、「姿勢と服装」という具体性を帯びた分析対象として措定されたのである。「姿勢と服装」を示す用例として、

- ・若い女が、ぽつんと一人ですわって、紅茶をのんでいた。
- ・直樹のおばあさんも紋付きをきて、やってきた。

が挙げられており(前掲『ことばの科学2』、p.17.)、これらは間違いなく、仁田説にいう《姿勢変化》《着脱》に該当する。

また、

「定型動詞によってさしだされる動作のし手がなにかを身につけているのを、そのし手の《ふるまい状態》であるとみなすならば、(中略)そのときには、《ふるまい状態》のもとに《姿勢》《服装》のほかに《携帯》をも理解しなければならない」

(前掲『ことばの科学2』、p.25.)

として、「姿勢と服装」の他に「携帯」を加えている。仁田説に与えた大きな影響を見出すことができよう。「携帯」の用例としては、

- ・頼んでおいた針医が小さな手箱をさげて、梯子段を上がってきた。

が挙げられており、仁田説の〈し手容態〉に符合しているのである。

では、再帰用法の動詞についてはどのように記されているのであろうか。やはり、「第二なかどめ」の4分類のうちの「II主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合」の項目のbで

「定型動詞によってさしだされる状態は、第二なかどめによってさしだされる《ふるまい状態》をともなっていることを表現している」(前掲『ことばの科学2』、p.17.)

とされ、その用例として、

- ・～好太郎さんが腕組みをして、うつむいていた。

が掲げられている。《ふるまい状態》という名称で表されているものは、仁田氏の〈し手容態〉に合致する。しかし、《ふるまい状態》の定義は、はっきりと記されることなく、論は進んでいく。この《ふるまい状態》を作りだす動詞として、

「第二なかどめの動詞は、『たつ』『すわる』『しゃがむ』『ねそべる』『手をあげる』『首をかしげる』『足をなげだす』のような《ふるまい動詞》である」(前掲『ことばの科学2』、p.26)

と、《ふるまい動詞》ということばを使い、

「《ふるまい動詞》の結果として《姿勢》と《服装》とを理解している」(前掲『ことばの科学2』、p.27.)

と、《ふるまい動詞》の内容を二つあげている。しかし、先に書いたように《携帯》をも取り入れている箇所がある(p,25)ので、仁田氏のいう

(1)姿勢変化動詞「シャガム、坐ル」

(2)再帰動詞(再帰用法の動詞「首ヲカシゲル」「眼ヲ伏セル」を含む)  
「スリッパヲ履ク」「服ヲ着ル」

(3)対象変化動詞「鍵ヲモツ、トランクヲ下ゲル」

を、全て把握していることになる。だがそのまとめ方には問題が多い。

南説をみてみよう(前掲『現代日本語文法の輪郭』、p.79.)。

- ・髪ヲフリミダシテトピカカル。
- ・手ヲツナイデ歩キマシタ。

の「～テ1」の用例はどちらも、〈し手容態〉を描いている例であろう。「髪ヲフリミダシテ」は、再帰用法の動詞であり、「手ヲツナイデ」は、対象変化動詞といえよう。南氏は、従属句を3つの種類に分けている。それらは次のようである(前掲書、p.41.)。

A類：～ナガラ <非逆説—「カネガアリナガラ出ソウトシナイ」などの逆説の意味でないもの〉、～ツツなど。構成要素の範囲がもっともかぎられている。

B類：～タラ、～ト、～ナラ、～ノデ、～ノニ、～バ、など。構成要素の範囲がA類より広くなるが、次のC類よりはせまい。つまり、AとCの中間。

C類：～ガ、～カラ、～ケレド(モ)、～シなど。構成要素の範囲がもっとも広い。

そして、従属句を3つに分ける意味を南氏は内部構造における成分、要素の現れ方の違いであるとしている(前掲書、p.86.)。「～テ1」は、上記3類中、A類に属しているし、A類の句の述部の要素として現れない助動詞として、～マス、～ナイ、～タ・ダ、～ラシイ、～マイ、～ダロウ、～ウ・ヨウなどをあげている(前掲書、表3従属句の成分・要素、pp.96～97。参照)。さらに、

「主文との関係。従属句とそれを含む文(主文)との関係には、さまざまなものが考えられるが、ここで取り上げるのは、とくに主文の述部の文法的性格(なかでも、モダリティと呼ばれる範囲のもの)に関する制約の問題である」(前掲書、p.99.)

とし、結論として、

A類, C類 — 制約を加えない

B類 — 制約を加えるものと、加えないものとがある

として、「～テ2」や「～テ3」との相違を示している(前掲書、p.99.)。南氏のいう「～テ2」や「～テ3」は、それぞれ〈継起・並列〉、〈原因・理由〉となっており、述語成分の要素もシテ形の意味・用法の相違においては重要なものであることが示されているのである。

成田氏の説は、付帯状態のシテ節について言及しているところから〈し手容態〉に該当するシテ形については詳しく扱われている。「付帯状態のシテ節」の成田説ですすでに取り上げた「様態動詞」は、勿論〈し手容態〉に属する。その他にも「て」形が副詞的に用いられ、主節の動作主の様態・態度をあらわす動詞をI～IXまでまとめている(前掲成田論文、pp.145～146)が、そのうち、〈し手容態〉に符合するものをあげてみると、

IV再帰動詞 着る、かぶる、はく、(シャワーを)浴びる、(手袋を)はめる、(ネクタイ・ベルトなどを)する、(マフラーを)巻く、(めがねを)かける、などV保持をあらわす動詞持つ、かかえる、抱く、つかむ、など

VI再帰用法—姿勢をあらわすもの

頭をさげる、首をちぢめる、腰をかける、腕をくむ、手をつなぐ、手をたたく、手をふる、ひざをそろえる、つま先立ちをする、など

になる。IV再帰動詞については、

「これらの動詞では、他動詞でありながら自動詞に近い性質がみられる。

・帽子をかぶって外にでる。

・梶は上着のえりを指先でつまみ、肩からひっかけて表に出た。

再帰動詞では、動作主の働きかけはいったん『～ヲ』であらわされる対象にむかいながら、ふたたび動作主自信に向かって帰ってきて、結果として動作主の状態変化をあらわす。これを『再帰性』と呼ぶ」(前掲成田論文、p.148.)

と分かりやすい説明を付け加えている。さらに、

「この動詞は設置あるいはとりつけを意味する動詞類の一部であるが、設置する場所(『～ニ』であらわされる)が動作主の体の一部であることと、設置するものが衣類・アクセサリーなどに限られることが特徴である。また、アスペクチュアルな性質でも『～ている』で動作の継続の意味の場合と動作の結果の状態の意味の場合とふた通りあり、『て』形の継起的用法と副詞的用法にそれぞれ対応している」(前掲成田論文、p.148.)

と続けて述べられる。

三宅説では、この〈し手容態〉を表すものは、動詞分類の「維持」〔主体変化〕と、「過程／維持」〔主体変化〕がそれであり、

「維持」〔主体変化〕……座る、黙る、(目を)閉じる、持つ

「過程／維持」〔主体変化〕……着る、履く、(メガネを)かける

等がその例として出されている。

II-2 心的状態

仁田説で〈心的状態〉と仮称しているシテ節を表す動詞はふたつに分けられている(仁田論文、pp.97～98.)。

I 内的心理作用を表す動詞

「興奮スル、呆然トスル、あわてる」など

II 〈心的状態〉と〈し手動作〉の中間に位置するもので、心の動きを示す外的態度動作、表情動作を表す動詞

「ビクビクスル、オドオドスル、血相ヲカエル、ケゲンナ顔ヲスル」など

Iの用例としては次のような例があげられている(前掲仁田論文、p.97)。

・小関さん、花村、月川の二人も、みな呆然として神津さんの顔を見つめているばかり、  
～

これは、

「主たる動きが実現するときの主体の心的なあり方を表現することで、主たる事象の実現のされかたをあらわしたものである。このタイプのシテ節は、『ミナ呆然トシタ様子デ神津サンノ顔ヲ見ツメテイル』のように、『シタ様子デ～』で置き換えることができる」(前掲仁田論文、p.97.)

であり、心理作用を表す動詞がその心理作用を存続していることが、〈付帯状態〉を表す上で必要不可欠であるとする。

IIは、心の動きが外的態度に出てきているもので、その一例として、

・小太りの男はあいかわらずびくびく、おどおどして周囲を気にし続けた。  
 があげられている（前掲仁田論文、p.98.）が、これらは擬態語に「シテ」が付く形といえるだろう。

また、物理的な外的動作と心的状態の間に位置するものに、《表情動作》があり、その例として、  
 ・何度も人にたずねてみたが、誰もげげんな顔をして、そんな工場は知らないといった。  
 が示されている（前掲仁田論文、p.98.）。

仁田説でいう〈心的状態〉に関して、他説はどのように考察しているのか、順に取り上げていくこととする。まず、森田氏の分類には〈心的状態〉に関しての記述はない。

言語学研究会では、先に分類されていたⅠ～Ⅳの分類中のⅢにその記述が見られる（前掲『ことばの科学2』、p.18.）。

Ⅲiv 定型動詞によってさしだされる動作のし手の心理的な状態を、第二なかどめがとらえていて、そうすることで、主要な動作を特徴づけているとし、その用例として、

・酒好きの佐山は安心して、ウイスキーを飲みました。

・「それは五千羽でしょうー」と、富永はまじめくさって、こたえた。

が示されている（前掲書、p.19.）。しかし、後に「し手の心理的な状態」について、再度記述しているところがある。

「第二なかどめが、定型動詞によってさしだされる動作の心理的な側面をとらえているばあいがある。第二なかどめは動作の実行にともなう、し手の感情とか態度とかいうような、心理的な状態をさしだして、動作のあり方を特徴づけているのである」

（前掲書、p.30.）

として、「し手の心理的な状態」を念押ししている。そうした「し手の心理的な状態」を表す動詞として、「がまんして、すまして、おちついて、おもいきって、すすんで、このんで、しょげかえて、あっけにとられて、つんとして、いきりたって、あまんじて」などをあげ、その用例を示している（前掲書、pp.30～31.）。さらに興味深いことは、

「心理活動に付随しておこってくる表情やみぶりを第二なかどめがとらえているばあいもある。この表情やみぶりは心理活動の側面であって、第二なかどめはこれをさしだすことによって心理活動を特徴づけている」

と、《表情動作》についても言及している（前掲書、p.31.）ことである。しかし、「表情動作」と「みぶり」とを「第二なかどめ」という一つの定義にいれているために、仁田説とは相違が生じてくる。例えば

・～耳をそばだてて、町の電車の響きをきいた。

・しかし、信吾は胸をのりだして、小川のこちら岸の篠竹のあいだを、目でさがしてみた。

という用例（前掲書、p.31）は、「し手容態」の再帰用法であろう。言語学研究会は再帰動詞、再帰用法に関しては分類の要因として述べていないのだが、「し手容態」で書き記したように《ふるまい動詞》の中に「首をかしげる」という例を取り出している。「首をかしげる」を《ふるまい動詞》であげるならば、上記用例の「耳をそばだてる」「胸をのりだす」も同様の扱いをしなければならぬ。

寺村論文、南論文はともに、大きな分類に終わっているので記述はない。

成田論文に目を移してみよう。成田説では、「し手容態」で書き留めたように、「様態動詞」以外の「て」形が副詞的に用いられる動詞分類Ⅰ～Ⅸの中で、〈心的状態〉に符合しているのは、

Ⅰ 心的態度を表すもの（がまんする、あらたまる、がんばる、あわてる、あわてふためく、

あんしんする、つとめる、好む、急ぐ、など)

III 表情をあらわすもの(笑う、泣く、ほほえむ、など)

VII 再帰用法—表情をあらわすもの(顔をしかめる、薄笑いをうかべる、まゆをひそめる、眼をとじる、(額に)青筋をたてる、口をすぼめる、口をあける、など)

VIII 再帰用法—状態、心的態度をあらわすもの(汗をかく、手に汗をにぎる、歯をくいしばる、くそ)しらぬ顔をする、〇〇づらをする、くちをつぐむ、心を静める、気をつける、心をくばる、など)

であろう。Iは、仁田説にいう「I 内的心理作用を表す動詞」と同じものである。がしかし、成田説のIと、仁田説のIには、若干の相違が見られる。成田氏は、

「この類(心的態度をあらわす動詞のこと—中野)の『て』形の中には、『急いで』『あわてて』『好んで』などすでに副詞とみてもよいものもあり、辞書によっては副詞として見出し項目にたてるものもある」(前掲成田論文、p.147.)

としている。仁田氏の分類で「②語相当のもの」に入っている動詞(あらためて、まとまって、だまって、ムキになって、急いで)と、やはり仁田氏の分類で、「I 内的心理作用を表す動詞」に入れられている動詞(あわてる)が、成田説では混在しているのである。これは、節と語の問題であり、用例の出し方による相違だとみるのが妥当であろう。例えば、

・油断していたぼくらは相当にあわてて応戦したが、～(仁田論文 p.97.)

・今におよんであわてて二年制の短期大学を作るぐらいなら、～(成田論文 p.146.)

の相違は節のあり方に関係してくる。つまり、前者の用例のばあい、「相当に」と「あわてて」の間の接合度合いが高く、ほぼ一語をなしているといっている。しかし、後者の用例のばあい、「今におよんで」と「あわてて」は疎遠でさえある。「あわてて」はなくても意味は通じるのである。上記2用例は「あわてて」の用例ではあるが、文中での座り具合には異なった響きがあるといえよう。

仁田氏は、「②語相当のもの」すなわち「より副詞化したもの」という分類をしているが、そこでは、

「〈付帯状態〉は、主たる事象の実現のされ方を表すものであった。その意味で〈状態の副詞〉と同趣の機能を果たしている。(中略)〈付帯状態〉のシテ形接続は、シテ形接続の中でも最も節性の低い存在であった。節的度合いの最も低くなったものが、(中略)〈より副詞化したもの〉である」(前掲仁田論文、p.102.)

と記されている。さらにこれを細分化すると、

(a)シテ部分が一語(相当)で形成されているもの

(b)シテ部分が慣用句になっているもの

のようになるという(前掲仁田論文、p.102.)。(a)のシテ節の例として、「あらためて」「まとまって」「だまって」「ムキになって」「急いで」が挙げられている。(b)の例としては、「体力をふり絞って」「先を争って」が示されている。

三宅論文には、〈心的状態〉に関する記述は見られない。

### II-3 し手動作

仁田論文の〈し手動作〉を表す動詞は、主体運動を表す動詞で、繰り返しの事象を表しているものである。

「机を叩いて、なんだ、こいつが犯人だったのか、と地団駄ふんで口惜しがったが～などのシテ節は、主たる事象の〔口惜シガッタ〕コトの実現のされ方を表している。この『叩ク』

は、繰り返しの事象を表している。(中略)主体運動の動詞がシテ形を取って主たる実現のされ方を表す〈付帯状態〉の形成をするにあたっては、シテ形で繰り返しの事象を表すことができれば、可能になる」(前掲仁田論文、p.99.)

とし、用例として「忙しく足を動かして」「伝票をひらひらさせて」「さらさらと音を立てて」「キヤーカー言って」が挙げられている。また、仁田論文では、し手動作を表すものとして、繰り返しの事象を表す動詞の「畳語形」(たとえば「泣き泣き」など)もあるという。

森田論文では、

「前件が瞬間動詞でも、反復行為の場合は『手をたたいて選手団を迎えましょう』と同時進行となる。」(前掲『基礎日本語辞典』p.754.)

のように「反復行為」という名称で〈し手動作〉を表す動詞を示している。

言語学研究会、寺村論文及び南論文には〈し手動作〉に該当する記述はない。

成田論文は様態動詞や、主節の様態・態度を表す動詞の副詞的用法を取り上げているので〈し手動作〉に関する記述は書かれてない。

三宅論文にも記載はない。

## II-4 付属状況

仁田氏は、〈付属状況〉シテ節は、〈付帯状態〉のゴミ箱的存在のものだとする。「その中核を構成するものは、主体の様態的あり方にかかわるものである」(前掲仁田論文、p.100.)として次の4点を挙げている。

### (1)再起・受動的動きの動詞

- ・月光を浴びて家へと帰ってくる。この二人の、～乙女らの姿には～  
「朱に染めて」「泥にまみれて」など

変化後の状態維持が取り上げられているのではなく、再帰・受動的動きそのものの存続が、主体の様態的あり方を形作っているもの(前掲仁田論文 p.100.)

### (2)動詞が主体の様態的あり方を表すもの

- ・子供達ハ輪ニナツテ歌ヲ歌ツタ。  
「先に立って」など

姿勢変化ではないが、変化後の状態維持が取り上げられているもので〈し手容態〉に近いもの(前掲仁田論文、p.101.)

### (3)対象変化動詞(主体の様態的あり方とはいえないもの)

- ・幸いにも神津恭介は、そのとき自分の正体をかくして、白泉ホテルに滞在中だった。  
「ズボンと靴をびしょびしょにして」「次の部屋に弱い電灯をつけて」「豆電球も付けないで」など

変化後の対象のあり様が存続し、主たる事象と統一空間に存し、主たる事象とともにより大きな事象を作ることによって、〈付帯状態〉を形成する。同存状況とでも呼べるもの(前掲仁田論文、pp.101～102.)

### (4)「ヨウニシテ」

- ・彼は～、ふたたび泳ぐようにして、入口から離れの中へ姿を消して行った。  
「顔をそむけるようにして」

「ヨウニシテ」は、シテ形だけでは〈付帯状態〉にならないタイプを〈付帯状態〉にする働きを有している(前掲仁田論文、p.102.)

などが挙げられている。

森田氏は、「同時進行」に〈し手容態〉を中心にまとめているので、仁田氏の指摘するような「付帯状況」に該当する例と説明は見当たらない。

言語学研究会の論文では、先の彼らの分類に〈付属状況〉に該当しているものが見られる。

Ⅲ(a) 定形動詞によってさしだされる、主要な動作のあり方あるいは様態を特徴づけている。

という記述がそれである(前掲『ことばの科学2』p.18.)。そこで次のような用例を挙げている。

- ・ふと声をあげて、その一節を読みだした。
- ・黄ばんだ砂煙が渦を巻いて、やってきた。

そして、この用例に対し、

「ふたつの動作はふたつの動作をさしだしているのではなく、ひとつの動作をことなる側面からとらえていることになる。」(前掲書 p.18)

と注釈している。また、Ⅳとして〈付属状況〉と考えられる次のような記述が見られる。

Ⅳ 第二なかどめの動詞が具体的な動作をさしだして、定形動詞がその動作を意義づけている。(前掲書 p.19.)

という定義がそれである。その用例として、

- ・しきりと落葉をあつめまわって、あそんでいる子供の群れもみえた。
- ・兄弟二人は一年ばかりも一緒に岸本の子供の世話をして、くらしした。

(前掲書 p.19.)

さらに、同書 p.20には以下のような用例と解説が掲げられている。

- ・信吾は枕もとの明かりをつけて、時計をみた。

第二なかどめの動詞がふくみとしてさしだす《状態》のなかでのみ、定形動詞によってさしだされる動作は進行することができる。

また、同書 p.29には再度、

「(8)第二なかどめの動詞が、定形動詞によってさしだされる動作の側面をとらえていて、そうすることで、その動作のあり方、様態を特徴づけているばあいがある。」

というふうにⅢ(a)での説明を持ち出してきている。理論の混乱がみられるのである。ただここでは、

「ふたつの動詞はふたつの動作をさしだしているのではなく、ひとつの動作をとらえている」とされ、

「ふたつの動詞が第二なかどめでくみあわされることによって、ひとつの動作が具体性を獲得していく」

とされている(同書 p.29.)。つまり、ひとつの動作を具体的に表すために「第二なかどめ」が用いられたとするのである。そしてその用例として、

- ・はって、川端のほうへいった。
- ・地響きをたてて、列車がホームへはいつてきた。

などが示されている。たしかにそうした機能は認めるが、Ⅲ(a)との区別ははなはだところもとない。

さらに、

「第二なかどめが動作の側面をし方としてとらえるばあいでは、その第二なかどめがさしだすものは動作的であるが、動作の側面を様態としてとらえているばあいでは、それは状態的であって、し方と様態とではいくらちがっている」(同書 p.30.)

とし、その用例として、

- ・外国映画で、田舎の男女が輪になって、グルグル踊りまわるやつがあるだろう、あれだよ。
- ・縦隊となって、道路上をすすんだ。
- ・裸になって、水浴している六人の日本兵をとらえた。
- ・翌朝、六時ごろ避難者満載の汽車にのって、かえってきた。

などが挙げられている。「し方」と「様態」とではいくらか違うと考えられるケースであるという。

すんなりとは理解しがたいが、確かに「し方」と「様態」とではいくらかの違いがある。

「空間的な関係のあり方を表現する」動詞として、「ならぶ」「はさむ」「へだてる」「そう」「めぐる」などがあげられているが、これらは〈付帯状態〉のゴミ箱、すなわち〈付属状況〉に相当する表現であろう。空間的な配置の関係を表す動詞の存在を指摘しているのは言語学研究会の特徴であろうか。

寺村氏、南氏には〈付属状況〉についての記述は見られない。

成田論文では、言語学研究会の「空間的な配置関係を表す動詞」と同意の分類が見られる。それは、先にも挙げた動詞分類のうちの

#### IX、位置関係をあらわす

隣り合う、はなれる、並ぶ、前／背にする

など（前掲成田論文、p.146.）であり、その説明としては

「複数の動作主相互の、あるいは動作主の他のものに対する位置関係をあらわすものである」とあり、

- ・隣り合って、一つの車内に身を置いていても、～
- ・にもかかわらず、花輪は、律子とはなれて行動していた。

の用例が示され、他には「距離を置いて」「前にして」などが記載されている。

三宅論文では、「結果持続」（「過程／結果持続」も含む）が〈付属状況〉に該当する分類のようだ。

- ・酒に酔って、車を運転した。
- ・びしょびしょに濡れて、部屋に入ってきた。

「維持」の場合ほど、生産性は高くないが、付帯状況を表し得る。（前掲三宅論文、p.449.）

ここで、三宅氏のアスペクト的な素性に基づく動詞の分類で、「結果持続」の動詞と「過程／結果持続」の動詞を再度みよう。

「結果持続」… { [主体変化]: 遅れる／忘れる／酔う／（病気に）かかる／等  
[客体変化 [客体変化]: 出す／無くす／等

「過程／結果持続」… { [主体変化]: 移る／脱ぐ／渡る／習う／等  
[客体変化]: 集める／入れる／結ぶ／揃える／等

三宅氏が指摘するように、上記の動詞の場合、「付帯状況として成立することが可能である」という表現が妥当であろう。

## II-5 より副詞化したもの

〈付帯状態〉の最後に〈より副詞化したもの〉として、仁田氏は、

- (1) シテ部分が一語（相当）で形成されているもの
- (2) シテ部分が慣用句的になっているもの

のふたつを挙げている。この点については、「心的状態」のところで、成田論文との関連で多少論じておいたが、仁田氏は、一語的存在から成り立っているものの例を次のように挙げている。

- ・安野小隊は、～S 鎮という部落に、まとまって駐留した。

- ・慎吾がだまって水を汲んできた。

その他、「あらためて」「ムキになって」「急いで」なども語相当のものとしている(前掲仁田論文 p.103.)。

慣用句になっているものには、

- ・彼女は体力をふり絞って、～和泉を撃退しようとしていた。
- ・同僚は先を争ってワクチンの接種を受けたものだが、～

などの事例が挙げられている(前掲仁田論文 p.103.)。

副詞相当の語については、連用形接続との関係で考察すべきであり、副詞として定着しているもの、連用形接続では表現しないものなどがその対象となろう。

## おわりに

以上、付帯状態をあらわす「シテ形接続」が、シテ節や主節の動詞を中心に、どのようなタイプの動詞がどのような意味用法をもたらすのか、シテ節や主節の表している事象の意味タイプがどのようなものであるのか、を先行する5説を中心に概観してきた。日本語学習者にとって「シテ形」の学習は重要なファクターである。その重要性は表現の多様性に由来している。日本語教育でte-formとよばれている「シテ形接続」は多様な意味を有しており、それらの精緻な分類作業は必ずや日本語教育に奥深さを付与することになろう。そのためにも、理論の一層の精緻化が望まれるのである。本稿では、複文における「シテ形接続」の用法に焦点を当て、とりわけ「付帯状態のシテ節」について詳述してみた。本稿で用いた分類のための用語は、仁田氏のシテ形の意味タイプの分類をベースにしている。仁田氏の用語では不十分と思われる部分については、他の先行論文の分類法や用語を併せて用いた。「シテ形接続」の多様性は、付帯状態のみならず、時間的継起、起因的継起、並列などの意味を含有するところにある。これらについては、次の論稿で詳述するつもりである。

外国語教育としての日本語文法はいま整理途上にある。旧来の橋本文法を根幹とする学校文法体系では、日本語教育はできない。国語学から日本語学への呼称の転換もそのひとつの現れであろう。言語学の一分野としての日本語学の、なかならず日本語文法の確立が望まれているのである。そうした試みの延長線上に本稿があることは言うまでもない。

## 参考文献

- ①国際交流基金日本語国際センター『日本語初歩』1981.
- ②TSUKUBA LANGUAGE GROUP, "SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE" Vol.1, 凡人社, 1991.
- ③寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版, 1991.
- ④仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版, 1995.
- ⑤森田良行『基礎日本語辞典』角川書店, 1989.
- ⑥森田良行『日本語の類意表現』創拓社, 1990.
- ⑦言語学研究会『ことばの科学2』むぎ書房, 1989.
- ⑧南不二男『現代日本語文法の輪郭』大修館書店, 1993.
- ⑨南不二男『現代日本語の構造』大修館書店, 1974.
- ⑩仁田・宮島編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版, 1995.
- ⑪益岡・田窪『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版, 1992.
- ⑫森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』明治書院, 1988.
- ⑬中村 明『センスある日本語表現のために』中公新書, 1994.

- ⑭大野 晋『新版 日本語の世界』朝日新聞社, 1993.
- ⑮時枝誠記『日本文法 口語篇』岩波書店, 1992.
- ⑯江副隆秀『外国人に教える日本語文法入門』創拓社, 1991.
- ⑰橋本進吉『国語法研究』岩波書店, 1948.
- ⑱国立国語研究所(永野 賢)『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版, 1960.
- ⑲益岡隆志『24週日本語文法ツアー』くろしお出版, 1993.
- ⑳阪倉篤義『改稿 日本文法の話 第三版』教育出版, 1993.
- ㉑文化庁『日本語と日本語教育―文法編―』大蔵省印刷局, 1988.
- ㉒奥津・沼田・杉本『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, 1990.
- ㉓佐久間鼎『現代日本語法の研究』くろしお出版, 1991.
- ㉔N・チョムスキー『文法理論の諸相』研究社, 1991.
- ㉕鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房, 1990.
- ㉖飛田・浅田『現代副詞用法辞典』東京堂出版, 1994.
- ㉗鈴木・林編『研究資料日本文法⑥』明治書院, 1984.

## On “Shite” Form Conjunction

— Theoretical Approach to Incidental Condition —

Harumi NAKANO

“Shite” form is very convenient for the student of Japanese because it is possible to use it for various meanings of the verb. However this convenience also makes it easy to make mistakes. In this paper I have described in detail the meaning and use of the “shite” form, paying attention to the differences of the nature and the meaning of the verb. I referred to five former theories which treat the “shite” form, but in Dr. Nitta’s theory is the core of this paper. The classification of the “shite” form is a useful tool for the student of Japanese.

## The Structure of Roman Slave Society in the Early and Middle Empire: a Reconsideration on “*servi vicarii*”

Noriaki BABA

Because of the detailed information on Roman brick stamps collected in *CIL*. XV and *AE*., they afford us the best material for study of labor relations on the large landed properties owned exclusively by the emperor and aristocrats.

One of them, which were manufactured on the kilns of Domitia Lucilla, grandmother of the Emperor Marcus Aurelius (A. D. 161-180), bore the name of a slave who possessed his own slaves, i. e. *servi vicarii* as known frequently in legal texts.

Investigating these stamps and epitaphs of *familiae Caesaris* of the emperor and of the slaves employed in the households of Roman nobles, the author has reached the conclusion that Roman slavery took on a uniformity of structure, not only in the *familia Caesaris* and *familia urbana*, but also in the *familia rustica*, while remaining principally in the M. Weber and K. Hopkins camp as to the structure of ancient slave society itself.